

祖父母との人間関係が大学生の自己受容と 対人態度に及ぼす影響

關 戸 啓 子^{*1}

要 約

核家族化に伴って、現代の子どもたちの多くは、祖父母など高齢者と接する機会が少ないなかで養育されている。このような状況は、子どもたちの人格形成に何らかの影響を与える可能性があると考えられる。

そこで、大学生96名を対象にアンケート調査を実施した。祖父母との同居経験の有無や祖父母が好きか否か等の質問と、自己受容測定尺度と情動的共感性尺度に回答してもらった。回収数は80名で有効回答率は100%であった。分析の結果、自己受容測定尺度および情動的共感性尺度の得点ともに、祖父母との同居経験の有無による差は認められなかった。同居経験の有無に関わらず、祖父母が好きと回答した学生は、嫌いとは回答した学生より自己受容的であり、有意差が認められた。また、暖かい人間関係の家庭で育ったと思うと回答した学生は、そう思わないと回答した学生に比べて自己受容的であり、有意差がみられた。一方、祖父母や家庭内での人間関係は、情動的共感性尺度の得点に対しては、あまり影響を与えてはいなかった。

本調査から、好きな祖父母がいることと、暖かい人間関係の家庭で育つことが自己受容を高める要因の一部であることが示唆された。子どもたちの成長過程において重要なのは、単に祖父母との同居経験ではなくて、祖父母が好きと思えるような交流体験であると考えられる。

はじめに

現代社会の特徴ともいえる少子化や核家族化は、さまざまな問題を生み出している。子どもの成長発達の観点から考えると、子どもは限られた人数の小家族のなかで養育されることになる。この点に関して、「子どもたちは人間関係の接し方やかわり方を自然発生的に習得する場が減少し、閉じられた親子関係や少数の人間関係に限定されたきわめて広がりがない空間で人間関係の形成過程を過ごしているのが今日の状況であり、異年齢とのかかわりというに及ばず同年齢でさえも、相互交渉の少ないなかで生活している子どもたちにとって、人間関係の様々な実相を体験する場は限定されてきており、物質的豊かさとは反比例して人的環境は目を覆うほどの貧困さを呈するようになってきた」¹⁾と指摘されている。つまり、少子化や核家族化は、子どもたちの人間関係形成にも影響を与えているのである。

様々な人間関係を体験することによって、個人は

社会的適応をとげていくのであり²⁾、限定された人間関係のなかで養育された子どもたちの社会的適応が、懸念される。社会的適応は、個人全体のありかたを含むものとして、人格の適応としてとらえるべきものであり、人格内部の心理的な諸領域が力学的に均衡がとれている状態と解釈される²⁾。狭い人間関係のなかで育った子どもたちには、この社会的適応、つまりは人格形成に何らかの特徴が生じている可能性がある。子どもたちの人間関係を狭めている要因には、少子化による兄弟姉妹の減少、核家族化による親との密接な人間関係、地域における異年齢の子ども集団の崩壊など様々な社会的変化が考えられる。このなかで、小稿では核家族化に伴い、祖父母との同居経験がない子どもたちにおける人格形成の特徴について検討する。これまで、人格形成に果たす親の役割が大きく取り上げられることが多かったが、社会化する過程の子どもたちにとっては、祖父母も大人としてのモデルであり、その役割は同様に大きいと考えたからである。そこで、大学生にア

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科
(連絡先) 關戸啓子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

ンケートを行い、特定の心理尺度と祖父母との同居経験の有無等との関連を調査した。

心理尺度は、自分のありのままの姿を受け入れる程度を測る尺度である自己受容測定尺度^{3,4)}と、他者の気持ちに共感する程度を測定する尺度である情動的共感性尺度⁵⁻⁸⁾を用いた。幼児と高齢者の交流場面を参加観察した筆者の調査⁹⁾から、幼児は高齢者から受容される体験をするという結果が得られている。同様のことが祖父母と孫の間にも生じている可能性が予測される。受容される体験は、自己受容を高めるのではないかと考えられるため、自己受容測定尺度を学生に実施した。また、家族内に祖父母がいる場合には、祖父母が年をとっていく経過を、身近にみることによって、老人をいたわる気持ちや態度を身につけていく¹⁰⁾といわれている。そこで、祖父母との同居体験は、人へのいたわりやさしさを養わせ、思いやりのある対人態度を形成することに役立っているのではないかと考えた。他者の心情を感じとる能力を共感性というが、この共感性の程度はその人の対人態度（例えば、援助行動や思いやり、等）に影響する⁵⁾といわれている。よって、情動的共感性尺度もあわせて学生に実施した。

この2つの心理尺度と現在までの祖父母との同居経験や祖父母の好き嫌い等を、大学生を対象にアンケート調査し、結果を比較検討したところ若干の知見が得られたので報告する。

方 法

1. 調査対象と調査時期

A 私立総合大学において、某一般教養科目（全学年、全学部生用に開講されている選択科目）を受講している1年次の学生96名を対象に調査を実施した。回収数は80（回収率83.3%）で、有効回答数も80（有効回答率100%）であった。80名のうち男子学生は32名で平均年齢は18.81±1.20歳、女子学生は48名で平均年齢は19.04±0.77歳であった。

調査は、2000年10月に実施した。

2. 調査方法

対象学生に研究の趣旨を説明し、アンケート調査用紙を配付した。研究に協力が得られる学生は、次週の講義までにアンケート用紙に回答を記入の上持参するように依頼した。アンケートは無記名で実施し、回答用紙は講義室に提出用の箱を準備し回収した。

3. 調査結果の解析方法

2群間の差の検定には、ウィルコクソンの順位和検定を、3群間以上の差の検定には、クラスカル・ウォリス検定を用いた。

結果および考察

1. 学生の性別による違い

自己受容測定尺度と情動的共感性尺度を実施して得られた得点を、男女別に分けて表1に示した。自己受容測定尺度は、大学生を対象として作成された尺度で、26項目の質問から構成されており、得点の可能範囲は0点から26点である。得点が高いほど、自己受容的であると判断される。本研究結果からは、性別による有意差は認められなかったが、男性の方が自己受容的である傾向を示している。これは、本尺度開発時のデータ³⁾と一致している。

情動的共感性尺度は、中学生以上の青年および成人を対象として作成された尺度で、25項目の質問から構成されている。これには、3つの下位尺度があり「感情的暖かさ」「感情的冷淡さ」「感情的被影響性」と命名されている。「感情的暖かさ」は10～70点の範囲をとり、得点が高いほど感情的に暖かいことを示している。「感情的冷淡さ」は10～70点の範囲をとり、得点が高いほど感情的に冷淡であることを示している。「感情的被影響性」は5～35点の範囲をとり、得点が高いほど感情的に影響を受けやすいと判断される。本研究においては、「感情的被影響性」が女子学生の方が男子学生に比べて有意に高い得点を示した。本尺度開発時のデータ⁵⁾においては、女子学生の方が感情的に暖かく、冷淡でなく、感情的

表1 「自己受容測定尺度」「情動的共感性尺度」得点
—男女別—

性別 \ 尺度		自己受容 測定尺度 得点	情動的共感性尺度得点		
			感情的暖かさ	感情的冷淡さ	感情的被影響性
男子学生 (n=32)	M SD	18.75 4.54	56.69 6.62	27.00 8.93	21.84 * 5.68
女子学生 (n=48)	M SD	17.83 4.46	56.79 7.31	25.31 5.91	24.17 5.39

注) *: $p < 0.05$

表2 「自己受容測定尺度」「情動的共感性尺度」得点
—祖父母との同居経験別—

祖父母 (曾祖父母を含む) との同居経験	尺度	自己受容 測定尺度 得点	情動的共感性尺度得点		
			感情的暖かさ	感情的冷淡さ	感情的被影響性
(幼児期から大学入学時まで) 同居あり (n=23)	M SD	18.30 4.14	54.09 8.33	26.35 6.04	23.48 4.65
一時期 同居あり (n=18)	M SD	16.67 4.74	58.72 5.33	26.61 6.52	23.94 4.26
同居なし (祖父母との交流あり) (n=35)	M SD	19.06 4.18	57.09 6.27	25.54 8.23	22.31 6.55
同居なし (祖父母との交流なし) (n=4)	M SD	17.00 5.15	60.25 5.07	25.00 6.52	26.75 3.63

注) 各群間に有意差なし

に影響を受けやすいという結果が示されており、今回の調査もほぼ同じような傾向であった。よって、今回使用した心理尺度の結果における性差は、対象とした大学生に特徴的なものではなく、一般的な傾向であることが確認された。

また、心理尺度以外の質問項目である、祖父母との同居経験、祖父母の好き嫌い、暖かい人間関係の家庭で育ったと思うか否かについて、回答した選択肢に占める男女比を比較したが、全ての質問項目において有意差はみられなかった。

2. 祖父母との同居経験の有無による違い

学生に祖父母（以下、全て曾祖父母も含む）との同居経験の有無を質問し、次の4つの群に分けた。幼児期から大学入学時（大学入学に伴い別居になった学生を含む）までずっと祖父母と同居であった群、幼児期から大学入学時までに同居していた期間がある群、同居した経験はないが祖父母との交流（休みの日には遊びに行くなど）はある群、同居した経験もなく祖父母との交流も全くない群である。この群ごとに、心理尺度の得点を表2に示した。どちらの

尺度においても、各群間に有意差は認められなかった。単に祖父母との同居経験があるかないかということは、学生の自己受容や情動的共感性に影響を与えてはいなかった。

自己受容測定尺度得点をみると、一時期同居ありの群が最も低い得点を示し、同居なし（祖父母との交流あり）の群が最も高い得点を示している。有意差はないものの、予想に反する傾向を示している。情動的共感性尺度における、感情的暖かさの得点も、同居あり（幼児期から大学入学時まで）の群が最も低い得点を示し、同居なし（祖父母との交流なし）の群が最も高い得点を示しており、予想に反する傾向を示した。祖父母と同居していることが、祖父母から受容される体験ができるとか、いたわりの気持ちが養われるということと直接結びつくものではないことがわかった。

3. 祖父母の好き嫌いによる違い

祖父母と同居した経験もなく祖父母との交流も全くないと回答した学生以外に、祖父母の好き嫌いについて質問した。同居経験のある学生には同居した

表3 「自己受容測定尺度」「情動的共感性尺度」得点
—祖父母の好き嫌い別—

祖父母 (曾祖父母を含む) の好き嫌い	尺度	自己受容測定 尺度得点	情動的共感性尺度得点		
			感情的暖かさ	感情的冷淡さ	感情的被影響性
好 き (n=64)	M SD	18.97 ** 4.12	57.16 6.80	25.61 6.73	22.66 5.96
嫌 い (n=12)	M SD	14.50 4.34	53.42 7.79	28.33 9.83	25.17 2.37

注) **: $p < 0.01$

表4 祖父母が「好き」または「嫌い」な理由

	理 由	人数
好 き	やさしいから	21
	両親が働いているので、育ててもらったから	8
	話を良く聞いてくれるから	6
	何でも相談にのってくれるから	5
	自分のことを心配してくれるから	5
	いろいろなことを教えてくれるから	5
	自分を理解してくれるから	4
	一緒に遊んでもらったから	2
	かわいがってくれたから	2
	昔のことを良く話して、教えてくれるから	1
嫌 い	昔の考えを押し付けられるから	3
	きびしいから	2
	兄弟姉妹を差別して扱うから	1
	母から祖父母の悪口を聞かされて育ったから	1
	家庭内のけんかのもとになっていたから	1
	気分によって対応が変わるから	1
	最近のことを否定するから	1

注) 複数回答あり

祖父母のなかで、最も自分に影響を与えたと感じている祖父母について質問した。同居経験のない学生には、交流のある祖父母のなかで、最も自分に影響を与えたと感じている祖父母について質問した。「好き」「どちらかという好き」と回答した群と、「嫌い」「どちらかという嫌い」と回答した群に分けて、心理尺度得点を示したものが表3である。また、その好き嫌いの理由を自由に記載してもらった内容をまとめて、表4に示した。

自己受容測定尺度において、祖父母が好きな学生は、嫌いな学生に比べて有意に得点が高かった。祖父母と祖父母が好きといえるような人間関係を形成している学生は、自己受容的であることがわかった。情動的共感性尺度得点においては、有意差は認められなかったが、祖父母が好きな学生は、嫌いな学生より感情的に暖かい傾向を示した。

同居経験とは関係なく、祖父母が好きか否かによって、祖父母からの影響の受け方が変わっている。林¹¹⁾は、高齢者の性格について、長い人生経験に基づいた幅広い知識を持つ肯定的高齢者像がある一方、過去の思い出のなかに生きる、適応性の乏しい否定的高齢者像もあることを指摘している。さらに、子どもの場合、自分の考えや価値観を押しつける祖父母と同居したり、祖父母の家を訪れたときに口うるさく叱られれば、子どものこころのなかに否定的高齢者像が形成される。子どもの持つ否定的高齢者像の形成には、間接経験の影響も大きく、例えば、母親と祖父母との仲が悪ければ、母親の持つ否定的な高齢者像を子どもが共有することも考えられる¹¹⁾

と述べている。すなわち、祖父母がどのように孫に接し、孫がどのような祖父母像を形成したかによって、祖父母の持つ影響の仕方はプラスにもマイナスにもなるのである。

祖父母が好きな理由をみると、「やさしいから」が最も多い。これは、情動的共感性尺度において、感情的暖かさの得点が高いことに反映していると思われる。やさしく接してもらった経験を持っている学生は、他人にもやさしくできるであろう。一方、「話を良く聞いてくれるから」「何でも相談にのってくれるから」「自分を理解してくれるから」という理由は、祖父母が学生を受容してくれていたあらわれであり、学生の自己受容的な人格形成に影響を及ぼしていると推測される。祖父母が嫌いな理由をみると、高齢者の持つ過去へのこだわりや母親との不仲等をあげており、学生が否定的高齢者像を形成している様子が窺える。このような祖父母との人間関係が、学生の自己受容を低くし、感情的暖かさを乏しいものにしているのではないだろうか。

一般的に考えて、高齢者と頻繁に接する場合の方が、否定的高齢者像を持ってしまうような経験をする機会が多いと予想される。それ故に、前述の祖父母との同居経験の有無によって、心理尺度得点を比較した場合には、祖父母との同居経験がある方が、むしろ自己受容的でなく、感情的な暖かさも乏しいという傾向を示したのかも知れない。

同居という物理的な環境ではなくて、良い人間関係が祖父母と築けているかという質の問題が重要であり、祖父母との人間関係の質が人格形成に影響を

表5 「自己受容測定尺度」「情動的共感性尺度」得点
—暖かい人間関係の家庭で育ったと思うか否か別—

暖かい 人間関係の家庭で 育ったと思うか否か	尺度	自己受容測定 尺度得点	情動的共感性尺度得点		
			感情的暖かさ	感情的冷淡さ	感情的被影響性
そう思う (n=67)	M SD	19.00 ** 4.13	56.99 7.19	25.46 6.53	22.97 5.87
そう思わない (n=13)	M SD	14.08 4.11	55.54 6.06	28.69 10.18	24.62 3.66

注) **: $p < 0.01$

及ぼしていることが示唆された。

4. 暖かい人間関係の家庭で育ったと思っているか否かによる違い

学生は、祖父母との関係だけから影響を受けるわけではない。多様で複雑な人間関係から影響を受け、人格は形成されるのであるが、最も影響が大きいと考えられ、しかも祖父母とも関連の深い家庭内での人間関係について、学生に回答を求めた。暖かい人間関係の家庭で育ったと思うか否かについて質問した。「そう思う」「どちらかというと思う」と回答した群と、「そう思わない」「どちらかというと思う」と回答した群に分けて、心理尺度得点を示したものが表5である。暖かい家庭で育ったと思っている学生は、そう思わない学生よりも有意に自己受容測定尺度得点が高く、自己受容的であることが確認された。有意差は認められなかったものの、情動的共感性尺度において、暖かい家庭で育ったと思っている学生は、感情的冷淡さが低い傾向を示した。家庭内の人間関係の大切さがあらためて確認されたといえよう。

家庭内の人間関係には、祖父母の影響も大きい。神田¹⁰⁾は、核家族は親と子の間に他の成人が介在しないために、親の権威が大きくなり親密な親子関係を形成する。関係がうまくいっている間は良いが、相互関係がうまくいかなかった場合のデメリットは大きい。その点、祖父母がいる場合には、子育ての先輩としての助言や援助が得られたり、中間的立場で子どもを守ってくれたり、親の代替えとしての機能を果たしてくれたりすると述べている。つまり、親子関係がうまくいかなかった時に、祖父母が緩衝作用を発揮するというのである。このように考えると、子どものよりよい人格形成には、子ども自身が好きと思えるような関係にある祖父母が同居し、暖かい人間関係が形成されているような家庭での養育環境が理想的であるといえる。

ま と め

大学生を対象に、祖父母との同居経験の有無や祖父母が好きか否か、暖かい人間関係の家庭で育ったと思っているか否かをアンケート調査し、自己受容測定尺度と情動的共感性尺度の得点を比較分析したところ、次のような結果を得た。

1. 自己受容測定尺度と情動的共感性尺度の得点ともに、祖父母との同居経験の有無による有意差は認められなかった。

2. 祖父母が好きか否かにおいて、祖父母が好きと回答した学生は、嫌いと回答した学生より自己受容的であり、有意差が認められた。情動的共感性尺度の得点には、有意差がなかった。

3. 暖かい人間関係の家庭で育ったと思うと回答した学生は、そう思わないと回答した学生に比べて自己受容的であり、有意差がみられた。情動的共感性尺度の得点には、有意差がなかった。

本調査から、好きな祖父母がいることと、暖かい人間関係の家庭で育つことが自己受容を高める要因の一部であることが示唆された。一方、情動的共感性尺度の得点との間には、有意差が認められず、明確な関連は検証できなかった。しかし、子どもの人格形成に祖父母の存在が影響していることは確かであり、しかも、その影響の大きさには、祖父母が同居しているという物理的な家族形態が問題なのではなく、祖父母と良い人間関係であるかどうかに関係していた。

子どもたちの成長過程において重要なのは、単に祖父母との同居経験ではなくて、祖父母が好きと思えるような交流体験であるといえよう。この結果から考えると、祖父母が同居した暖かい家庭で育つことは理想であるが、核家族においても積極的に祖父母と良い人間関係を持てるような交流を行うことによって、子どもにプラスの影響を与えることは十分可能である。このような、祖父母との交流が可能な

い環境の子どもには、地域や学校において高齢者とのふれあいを継続的に頻繁に体験できる機会を提供することによって、家庭における祖父母とのふれあいに近い体験と効果が期待できるのではないだろうか。

稿を終えるにあたり、調査にご協力下さいました大学生の方々、またご校閲をいただきました武庫川女子大学大学院の小林剛教授に深謝致します。

文 献

- 1) 坂口哲司(1995)人間関係. 坂口哲司編, 保育・家族・心理臨床・福祉・看護の人間関係ー人間の生涯・出会い体験ー, 初版, ナカニシヤ出版, 京都, pp7-11.
- 2) 長谷俊彦(1985)社会に向けて. 篠置昭男, 乾原 正編, 人間形成を考えるー教育心理学入門ー, 初版, 福村出版, 東京, pp132-153.
- 3) 清水 裕(1994)自己受容測定尺度. 堀 洋道, 山本真理子, 松井 豊編, 心理尺度ファイルー人間と社会を測るー, 初版, 垣内出版, 東京, pp70-73.
- 4) 佐藤純子, 沢崎達夫(1985)大学生の自己受容に関する研究(1). 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 410-411.
- 5) 戸田弘二(1994)情動的共感性尺度. 堀 洋道, 山本真理子, 松井 豊編, 心理尺度ファイルー人間と社会を測るー, 初版, 垣内出版, 東京, pp322-326.
- 6) Mehrabian A and Epstein N (1972) A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, **40**, 525-543.
- 7) 加藤隆勝, 高木秀明(1980)青年期における情緒的共感性の特質. 筑波大学心理学研究, **2**, 33-42.
- 8) 加藤隆勝, 高木秀明(1981)青年期の自己概念と対人態度, 社会意識, 価値観との関係. 筑波大学心理学研究, **3**, 51-70.
- 9) 関戸啓子(2001)高齢者とのふれあいが幼児に及ぼす教育的意義の検討. 投稿中.
- 10) 神田道子(1981)核家族のメリット・デメリット. 桂 広介, 長島貞夫, 真仁田昭, 原野広太郎編, 家庭教育選集・4 母親の役割, 初版, 金子書房, 東京, pp176-188.
- 11) 林 洋一(2000)高齢者にみられる性格. 詫摩武俊, 鈴木乙史, 清水弘司, 松井 豊編, シリーズ・人間と性格 第2巻 性格の発達, 初版, プレーン出版, 東京, pp295-305

(平成13年5月24日受理)

The Relationship with Grandparents : Effect on Self-acceptance and Attitude toward People in University Students

Keiko SEKIDO

(Accepted May 24, 2001)

Key words : SELF-ACCEPTANCE SCALE, EMOTIONAL EMPATHY SCALE, UNIVERSITY STUDENTS, GRANDPARENTS, RELATIONSHIP

Abstract

With the advent of the nuclear family, many of today's children are being raised in an environment where there is little opportunity to interact with elderly people such as their grandparents. It is postulated that this situation may adversely affect the personality of children. In order to investigate the validity of this concept, a survey was conducted by questionnaire.

Ninety-six university students were asked such things as whether or not they had ever lived with their grandparents, and whether or not they liked their grandparents. They were also asked to answer questions that were used to assess their degree of self-acceptance and emotional empathy. The response rate was 100% (80 questionnaires returned). Analysis of the data indicated that there were no significant differences in self-acceptance or emotional empathy between those respondents who had lived with their grandparents and those who had not. Regardless of whether they had lived with their grandparents or not, those students who responded that they liked their grandparents had a significantly higher degree of self-acceptance than those who replied that they did not. In addition, students who replied that they thought they had been raised in a warm family environment had a significantly higher degree of self-acceptance in comparison to those who replied that they had not. On the other hand, the relationship with grandparents or family had little affect on the emotional empathy scale score.

The results of this survey suggest that having grandparents that one likes or being raised in a warm family environment can, in part, enhance one's self-acceptance. It is conjectured that what is important in the growth process of children is not just having lived with their grandparents, but being exposed to the kind of interpersonal experience that prompts them to like their grandparents.

Correspondence to : Keiko SEKIDO

Department of Nursing, Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.11, No.1, 2001 49-55)